



一隅を照らす仕事 ---序にかえて---

林望

明治の御一新で、またたく間に封建国家から近代国家へと脱皮を遂げた我が国の既往は、あたかも歴史上の奇跡のように見える。が、じつは奇跡でもなんでもない。江戸時代という平和の時代を保ち得た私どもの祖先は、その平和の時空のなかで、学問や文化に、驚くほどの知的投資をして来たという歴史を知らねばならぬ。諸国にあまねく寺子屋式の学校が活動し、士農工商を問わず少しでも余裕あれば教育に力を注いできたのが、我が国の歴史の一側面であった。そうしてまた、よほど山間辺陬の村々に至るまで、三都の貸本屋は行李に書籍を詰めて、富山の薬売りよろしく、「置き本」をして歩いたということが、先覚の研究によって明らかになっている。

そういう蓄積が、あたかも小国寡民の桃花源のような伊那の山里にもあったに相違なく、だからこそ、明治の御世になって瞬く間に学校の開設と初等教育が進み、牽いては自由民権運動にもなり、また笈を負うて東京に出、青雲の志を以て帝国大学等に学ぶ俊才たちをも輩出したのである。

しかしながら、その突出した一部分だけは記録され、記憶されることがあっても、それを下支えした人々の力についてはなかなか記録されることがなかった。

本書は、その伊那の郷に根を生やしてじっくりと地元の文化と向き合ってきた

著者嶋不濁君が、たとえば「捨てないで!!」運動の如き、あたかも地を這うような地道な活動を持続するなかで、たまさかに遭遇するさまざまの人や記録について、まずはそれを備忘録風に書き留めたものである。なかでも、黄眠先生日夏耿之介についての追跡考証は最も詳細で、その伝記的不備を補うべき知見をいくつか提出しているのは、頗る刮目に値する。

加うるに、中央文壇ではもとより、伊那地方でさえも、だんだんと忘れられつつある、しかし忘るべきでない異才たちについて、興味津々たる逸話を、まさにひとつひとつと拾い集めてくれているのは面白く、まことにありがたい仕事である。

「一隅を照らす」という言葉がある。伝教大師の遺訓であるが、国の宝と目すべきものは、金銀財宝の如きではなく、それぞれの立ち位置でしっかりと地についた、すなわち一隅を照らすような仕事をする人が、畢竟国の宝であるというのである。

誰の委嘱でもない、なんの金儲けにもならぬ、けれどもまさにここにあった文化的珠玉を、廃らぬように掘り起こし記録する仕事こそ、その一隅を照らすというべきであろう。

ここからまた、もっと系統的徹底的な研究も出てくるかもしれないが、まずは、その一隅の逸話のかれこれを、じっくりと翫味したいものだと思うのである。

二〇一五年桜花に雪降る夕に

東都菊籬高志堂の北窓下にて